

結ぶ想いは思い出の中に

登場人物

新井智花 (25)

主婦

新井祐樹 (12)

智花の継子

新井秀一 (33)

智花の夫

山口勝正 (58)

智花の父

山口芳枝 (56)

智花の母

富田恵 (32)

智花の姉

新井利一 (59)

秀一の父

新井圭子 (57)

秀一の母

塚本英夫 (60)

骨董品店店主

○ 斎場・式場

誰もいない式場ですすり泣く新井智花
(25)

目の前には新井秀一(33)の遺影。

その様子を入力から見る新井祐樹(1
2)

○ 中野小学校・外観

T「一カ月後」

○ 同・6年1組

子供たちが授業を受けている。

教室の後ろには保護者が並んでいる。

祐樹、後ろを振り向くと山口芳枝(5

6)と目が合う。

芳枝、祐樹に手を振る。

祐樹、会釈で返す。

○ 同・校門

祐樹と芳枝、歩いて来る。

芳枝「授業参観なんて、何年ぶりかしら」

祐樹「来て頂いてありがとうございます」

芳枝「本当は智花が来れたら良かったんだけど」

祐樹、俯く。

そこに小倉美和（12）と小倉良子（3

5）が手を繋いでやってくる。

美和「祐樹君、お母さんは？」

良子「美和」

祐樹「・・・」

芳枝「体調が悪くて来れなくなっちゃたの」

美和「そうなんだ」

祐樹、周りを見ると親子で楽しそうに

話したり、手を繋いでる生徒たちが目に映る。

祐樹「寄るところがあるので、先に帰ってい

て下さい」

祐樹、立ち去って行く。

芳枝、祐樹の後姿を見ている。

○山口家・リビング

芳枝と富田恵（32）が向き合って座っている。

恵「まだ引きこもってるの？」

芳枝、隣の和室にある仏壇に目をやる。

仏壇には穏やかな表情をした秀一の写

真が飾ってある。

芳枝「急に亡くなったんだもの。それにまだ一カ月しか経ってない。そう簡単には立ち直れないわよ」

恵「分かるけどさ、祐樹君もいるんだし、今のままじゃダメだよ」

芳枝「でももう少しだけそつとしておいて。

祐樹君のことは私とお父さんが見るから」

恵「2人ともあの子には甘いんだから。お父さんなんか一度も怒ったことないでしょ」

芳枝「そうだったっけ？」

恵「そうだよ。私には厳しかったくせに。どれだけ割り食ったか」

芳枝、時計を見る。

芳枝「幼稚園迎えに行かなくていいの？」

恵「時計を見る。」

恵「もうこんな時間か。じゃあ帰るね」

恵「立ち上がる。」

恵「少しだけ智花の様子見ていこうかな」

芳枝「いいけど、余計な事言わないでよ」

恵「分かってるって」

○公園

祐樹、ベンチに座っている。

視線の先には1人で砂場で遊んでいる

子供。

子供が立ち上がり走り出す。

その先には母親がおり楽しそうに話す。

祐樹、立ち上がり去って行く。

○同・智花の部屋

カーテンが閉めきられた薄暗い部屋。

智花、布団に入っている。

ドアがノックされ

恵の声「智花、入るよ」

ドアが開き、恵と芳枝が入ってくる。

恵「カーテンくらい開けなよ」

恵、カーテンを開けると外の明かりが

部屋を照らす。

智花「勝手に開けないで」

恵「気持ちは分かるけどさ、祐樹君の事もあ
るし、このままじゃダメだよ」

智花「お姉ちゃんなんか私に私の気持ちが分か
るわけない」

恵「あんたの為に言ってるんでしょ。祐樹君
は父親亡くなってるのに、それでも学校行
ってるんだよ。片やあんたは布団の中で閉
じこもってるだけ。血は繋がってなくても
母親でしょ。そんな中途半端な覚悟なら、
初めから結婚なんかするべきじゃない」

○同・玄関

祐樹、入ってくる。

智花の声「うるさい！お姉ちゃんに言われる

筋合いなんてない」

祐樹、二階を見上げる。

○同・智花の部屋

智花、布団の中で声を上げている。

芳枝と恵、智花を見てる。

智花「中途半端な気持ちで結婚してない。秀一がいたから育てられると思ったの。今じゃ赤の他人だよ。母親でも家族でもない」

恵「あんた本気で言ってるの？見損なった。今まで同情してきたけど、もう許せない」

恵、布団をはぎ取る。

智花「やめてよ」

智花、布団を奪い返そうとするが恵も離さず奪い合いになる。

恵「結婚したからには母親なの。家族なの。

あんたもそれを分かってしたんでしょ」

智花「分かってるよ。でも亡くなるなんて知らないもん」

恵「それでもあんたの子なの。自分の子には

責任持ちなさい」

智花「うるさい。帰って」

芳枝、間に入り

芳枝「あんた達やめなさい」

と布団を奪い取る。

智花、その場に座り込む。

智花「秀一は私の全てだったの。彼がいたから生きる事が出来た。これから先なんのために生きればいいのか？もう全部どうでもいいよ」

○同・階段

祐樹、俯いている。

○同・智花の部屋

部屋には智花、芳枝、恵。

恵「あんたね・・・」

芳枝「恵、今日はこの辺にしてあげて。幼稚園に迎えに行かないといけないでしょ」

恵、智花を見る。

恵「血は繋がってなくても親子なんだからね。
祐樹君はあんたを選んだの。それを忘れな
いで」

恵、部屋を出て行く。

○同・二階廊下

祐樹、音を立てないように急いで階段
を降りていく。

○同・玄関

祐樹、急いで靴を履き玄関のドアを開
け、今帰ってきたかのように装う。

恵、階段を降りてきて祐樹に気づく。

祐樹「こんにちは」

恵、笑顔を作り

恵「おかえり」

祐樹、靴を脱ぎリビングに向かう。

恵「祐樹君」

祐樹、振り返る。

恵「色々と辛いと思うけど、何かあったら言

ってね」

祐樹「智花さんも前みたいに元気になってくれると思うので、だからご心配ありません。ありがとうございます」

祐樹、リビングに入っていく。

○同・リビング（夜）

祐樹、芳枝、山口勝正（58）が食卓を囲んでいる。

祐樹の前には智花の分の食事が用意されている。

山口「智花は？」

芳枝「いらないうって」

山口「そうか・・・」

芳枝「もう何日もまともに食事してない」

祐樹、智花の分の食事を見ている。

祐樹「あ・・・」

○同・智花の部屋の前（夜）

祐樹と芳枝、部屋の前に立っている。

祐樹、食事を乗せたお盆を持っている。

芳枝「智花、祐樹君が食事持ってきてくれた

よ」

智花の声「いらない」

芳枝「ちゃんと食事とってないでしょ」

智花からの返答はない。

祐樹「部屋の前に食事を置いときます。良か

ったら食べて下さい。このままだと体壊し

てしまうので。それに、食べたら元気がで

ると思います」

智花の声「だからいらないって言うてるでし

よ」

芳枝「智花！祐樹君はあんたのために・・・」

祐樹「大丈夫です」

芳枝、祐樹を見る。

祐樹「余計な事をしてごめんなさい。でも心

配だったので・・・失礼します」

祐樹、お盆を持ったまま階段を下りて

いく。

○同・リビング（朝）

サントリーホール入口前の献花台に、
花を供えている人たちの映像がテレビ
に流れている。

リポーターの声「世界的ピアニストの新井秀
一さんが亡くなって一カ月経ちましたが、
花を持ってやってくるファンの方々は途絶
えることはありません」

祐樹、芳枝、山口、食卓を囲みテレビ
を見ている。

芳枝「祐樹君のお父さん、こんな多くの人た
ちに応援してもらってたんだね」

祐樹「はい」

○同・智花の部屋（朝）

智花、パジャマ姿でテレビを見ている。
秀一のファンがインタビューに答える
映像が流れている。

ファン「新井さんのピアノが支えになってい
ました。泣きたい時に聴くと、その悲しさ

を取り払ってくれるんです。初めてでした。
音楽ってすごいなって思ったの」

智花、ファンの言葉を聞いている。

○同・玄関（朝）

祐樹、ランドセルを背負って玄関前に
立っている。

向かいには芳枝。

芳枝「忘れ物は無い？」

祐樹「はい」

芳枝「じゃあ行ってらっしゃい」

祐樹「行ってきます」

と言い、玄関の扉を開けようとする
と、パジャマから着替えた智花が階段を降
りてくる。

祐樹「おはようございます」

無言で靴を履き替える智花。

芳枝「どこ行くの？」

智花「散歩」

智花、靴を履き終わると玄関を出て行

く。

祐樹と芳枝、顔を見合わす。

○サントリーホール入口前（朝）

智花、献花台の前に立ち、供えられた花を見下ろしている。

周りには花を添えている人が数名いる。

塚本の声「彼は良いピアニストでした」

隣を見ると塚本英夫（60）が立っている。

塚本「彼の弾くピアノが好きでした。まるで心を洗ってくれるような、そんな音楽でした」

智花「私はもう聞きたくない。ピアノの音を聞くと思い出すから」

塚本「演奏後でしたね倒れたのは」

智花「彼は私の支えだった。今もまだ亡くなつたって実感がない。でも受け止めなければ前に進めない。だからここに来たんです。だけどまだ進めそうにない」

塚本「・・・」

智花「誰よりも近くで彼のピアノを聴いていた。幸せになれるはずだった。その矢先に：」

塚本「それはさぞ辛かったでしょう」

智花「理解することはできない。この悲しみは誰にも取り除けないから」

塚本「大切なものは思い出の中にあります。良かったら見てみませんか？」

智花、塚本を見る。

○アンティークショップ・店内

塚本と智花、店内に入ってくる。

智花、周りを見渡すとアンティークの家具やインテリアが並んでいる。

塚本「この店は父から譲り受けましてね。買取などもしているんです。その中でも父がとても大切にしていた物があります」

塚本、店の奥にある扉の前で立ち止まる。

塚本「それは特別な力を持ったものでした」

塚本、扉を開け

塚本「どうぞ」

智花、恐る恐る部屋に入っていく。

○アンティークショップ・奥の部屋

智花、部屋に入ってくる。

薄暗い部屋の中央には扉の付いたアンティークのブックシェルフが置かれている。

その前にはペンとメモが置かれたサイドテーブルとアンティークの椅子。

塚本がブックシェルフの方へ歩いていく。

智花、塚本について行く。

塚本、ブックシェルフの前で立ち止まる。

塚本「これは思い出を映してくれるんです」

智花、不思議そうに塚本を見てる。

塚本、ブックシェルフの扉を開ける。

中には何も入ってない。

そちらのメモにご自身の名前と生年月日、現住所を記入して下さい。

智花、メモに氏名、生年月日、現住所を書く。

塚本「それをここに入れて下さい」

智花、メモをブックシェルフのに入れると、塚本が扉を閉める。

塚本「開けてみて下さい」

扉を開けると1冊のアルバムが入っている。

智花、驚いた表情でアルバムを見てる。

塚本「手に取って見て下さい」

智花、アルバムを取ると表紙にローマ字で智花のフルネーム。その下には生年月日が書かれている。

アルバムを開くと1枚の写真が張られている。

写真には交差点で秀一に腕を掴まれている智花の姿。

反対のページには写真サイズのポケット

トが付いている。

智花「これ、初めて秀一と会った時の・・・」

塚本「その写真は、今のあなたにとって必要な思い出になります。見るかどうか、後はあなたが判断して下さい」

智花、写真を見る。

智花「思い出を見るって、そんなの出来るわけない」

塚本「その写真を隣のポケットに入れた後、アルバムを閉じてください。目を瞑れば思い出が頭の中に映しだされます。信じられないと思います、騙されたと思ってやってみて下さい。私は店に戻るので、見終わったらアルバムを戻して扉を閉じて下さい」

塚本、部屋を出て行く。

智花、椅子に座り写真をポケットに入れてアルバムを閉じる。

緊張した面持ちで、ゆっくりと目を閉じる。

○回想・交差点（夜）

智花、虚ろな表情で立っていると、車が近づいてくる。

ヘッドライトが智花に当たると、車道に一步踏み出す。

クラクションが交差点に鳴り響く。

すると腕を掴まれ歩道に引っ張られる。

通り過ぎて行く車。

振り返ると慌てた様子の秀一。

秀一「大丈夫ですか？」

智花、虚ろな目で秀一を見てる。

○回想・ファミレス（夜）

智花と秀一、向かい合って座っている。

テーブルにはドリンクが2つ。

秀一、智花の顔を見ると俯いている。

秀一「やっぱり何か頼みましようか？」

とメニューを取る。

智花「何で助けたの？」

秀一「何でって言われても・・・」

智花「赤の他人でしょ。ほっとけばいいじゃん。私が死んでもあなたは何も変わらない」

秀一「・・・」

智花「目の前で死なれたら気分悪いか」

秀一「・・・言いたくなかったらいいんですが、何で死のうとしてたんですか？」

智花「・・・笑わない？」

秀一「はい」

智花「付き合ってた彼氏にフラれたの。この3年間彼の為に生きてきた。嫌われないように、もっと好きになってもらえるように、努力して尽くして、色んなもの犠牲にして、その見返りがこれ。頭が真っ白になって何の言葉も出てこなかった。もう生きてるのがどうでもよくなったの」

秀一「・・・」

智花「いつもそうなんだよね。失恋するたび落ち込んで、それで死にたくなって、ほんとバカみたい。ずっとこの繰り返し。何で学ばないんだろ」

秀一「人ってバランスを取って生きてると思うんです」

智花、秀一を見る。

秀一「恋愛、仕事、友人関係、趣味、色んなものが人生の中にある。失恋で極端に落ち込んでしまう人は、恋愛に多くの割合をかけてるんだと思います。上手く生きてる人って、1つのものが崩れても他でバランスが取れる人なのかなって。きっと恋愛と同等のものがあれば、変わるかもしれないですね」

智花「・・・」

秀一、ポケットからチケットを出す。

秀一「僕、ピアノを弾てるんですが、今度コンサートをやるんです」

秀一、チケットを智花の前に差し出す。

秀一「良かったら来てみませんか？もしかしたら趣味になるかもしれないし」

智花、チケットを受け取る。

○回想・山口家・リビング

智花、秀一から貰ったチケットを見てる。

恵の声「新井秀一のチケットじゃん。それどうしたの？」

恵、智花の前に座る。

智花「貰った」

恵「新井秀一のチケット全然取れないんだから」

智花「有名な人なの？」

恵「有名だよ」

智花、チケットを見る。

恵「知らないなら、チケットちょうだい」

智花「ダメ。私が行く」

恵「いいなあ」

○回想・文化ホール・大ホール（夜）

ワンピースを着た智花が入ってくる。

周りにはジャケットやドレスを着た人たちが座っている。

自分の席を探して座る。

緊張した面持ちで待っていると、観客席の照明が落ち、秀一がステージに入ってくる。

スーツ姿で眼鏡は掛けていない。

客席に会釈をして椅子に座り、鍵盤に指を置く。

ホールに静寂が広がると、ピアノの音色が響き始める。

智花、演奏に聞き入っている。

○回想・同・関係者入口（夜）

智花、入り口前に立っている。

そこに眼鏡をかけたスーツ姿の秀一がやってくる。

秀一「お待たせしました」

○回想・駅までの道（夜）

智花と秀一、歩いている。

秀一、ズボンからシャツがはみ出して

いる。

智花「すごい人だったんだね。ネットで調べたら天才ピアニストって書いてあった」

秀一「ネットだから大袈裟に書いてるだけですよ」

智花「でも本当にすごかった。あの時間だけは嫌なことも全部忘れられて、まるで別の世界にいるみたいだった」

秀一「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

智花「なんか不思議だった。音だけなのに生きてるみたいで。今は悲しいんだろうなとか、嬉しいんだろうなって言うのが伝わってきた」

秀一「音楽って凄いですよね。言葉もないのに、音だけで感情や背景を伝えることが出来る。悲しい時にはその辛さを取り除いてくれて、命を与えてくれる。音楽にはそういう力が宿ってるんです」

智花「・・・」

秀一「僕は話すのが苦手だから、言葉で人を

救うことは出来ないけど、でも音楽を通じてなら変えることが出来る。そう信じてピアノを弾いてるんです」

智花、秀一を見てる。

秀一「ちよっと大袈裟だったかな」

智花「大袈裟」

秀一「そうですね」

智花「でも私は楽になれた。あなたのピアノで」

秀一「良かったです」

智花「ねえ、次はいつあるの？」

秀一「来月です」

智花「じゃあ来月も行こうかな」

秀一「もう席埋まってますよ」

智花「お姉ちゃんも全然取れないって言うってた」

秀一「CDあるんですけど、いりますか？」

智花「いいの？」

秀一「はい」

智花「じゃあお礼に」

智花、秀一のズボンから出てるシャツをしまう。

智花「はい」

秀一「すいません」

智花「舞台の上ではカッコいいのに」

秀一「もう少し気をつけます」

智花「フフ」

秀一、智花の笑った顔につられ笑う。

○回想・走る電車内（夜）

智花と秀一、座ってる。

周りには数名の人。

智花「なんか意外」

秀一「何がですか？」

智花「有名なピアニストなのに電車で移動してるなんて」

秀一「全く知らない人たちが同じ空間で同じ方向に進んでる。電車という箱がみんなを繋げてる感じが好きなんです」

智花、秀一を見ている。

秀一「コンサートも一緒に、初めて会う人たちと同じ空間で同じ時間を共有する。曲が終わったなら一緒に拍手して、その瞬間だけ1つになる。僕のピアノで知らない人たちを繋いでいる気がして、自分が生きてる意味を感じられるんです」

智花「生きてる意味か・私はないかも」

秀一「意味なんて何でもいいんですよ。美味しいご飯を食べるとか、毎週映画を見るとか。そんな小さい事を楽しめることが、人生では大きなことだと思うんです。意味なんていくらかでも見つけられる。ただ大きくするから分からなくなるだけで、小さいものに意味を見つけられれば、それが支えになる」

智花「私も見つけられるかな」

秀一「見つかりますよ」

智花「ねえ」

秀一「はい」

智花「連絡先交換して」

秀一「連絡先ですか？」

智花「CDのこともあるし、それと話し相手になっただけなのよ。あなたと話していると心が温まるっていうか、私まで優しい人になった気がする。だから悩んだりしたら、話し聞いてほしいの。ダメ？」

秀一「僕で良かったら」

智花「ありがとう」

○アンティークショップ・奥の部屋

智花、ゆっくりと目を開く。

○同・店内

塚本、レジで本を読んでいると奥の部屋の扉が開き智花が出てくる。

塚本「どうでしたか？」

智花「・・・」

塚本「思い出に戻りたくなったら、また来て下さい。その時に必要な思い出を映してくれるので、次は違うものが見れるかもしれ

ません」

智花「・・・」

○中野小学校・6年1組

先生が生徒たちにテストを返却している。

何人かの名前が呼ばれた後

先生「新井」

祐樹、立ち上がりテストを受け取りに行く。

渡されたテストを見ると100点と書かれている。

○小倉家・玄関

美和と祐樹、入ってくる。

美和「ただいま」

と言うと、良子が出てくる。

良子「おかえり」

美和「祐樹君、連れてきた」

良子「いらっしゃい」

祐樹「お邪魔します」

美和、ランドセルからテストを取り出す。

美和「見て、85点も取ったよ」

良子「頑張って勉強してたもんね。えらい、えらい」

涼子、美和の頭を撫でる。

祐樹、2人のやり取りを見ている。

美和、祐樹のランドセルについてるペンギンの人形を見る。

美和「祐樹君、ペンギンさん綿が出てる」

祐樹、人形を見ると少し破けてて綿が出てている。

○山口家・リビング（夕）

芳枝、テレビを見ていると、祐樹がリビングに入ってくる。

芳枝「おかえり」

祐樹、会釈する。

芳枝「そうだ、今日テスト返された日でしょ？」

「どうだった？」

祐樹「100点でした」

芳枝「さすが祐樹君。それじゃあ今日の夕飯は少し豪勢にしようかな」

祐樹「ありがとうございます。智花さんは？」

芳枝「まだ帰って来てないの」

祐樹「そうですか・・・」

芳枝、祐樹を見る。

祐樹「あ・・・」

芳枝「何？」

祐樹「これ、直してもらってもいいですか？」

「と言うと、ランドセルについてるペン

ギンの人形を見せる。」

× × ×

芳枝、ペンギンの人形を縫っている。

隣には祐樹。

芳枝「出来た」

祐樹に人形を渡す。

祐樹「ありがとうございます」

祐樹、ペンギンの人形を見てる。

芳枝「大切なんだ、この人形？」

祐樹「・・・とても」

芳枝「また破けたら言って」

祐樹「はい」

○コンサート会場前（夜）

智花、献花台の前に立っている。

○同・祐樹の部屋（夜）

祐樹、1000点のテストを見ていると、
玄関の扉が閉まる音がする。

○同・玄関（夜）

智花、靴を脱いでいる。

リビングから芳枝と山口が出てくる。

芳枝「どこ行ってたの？」

智花、靴を脱ぎ終わるとそのまま階段
を上がろうとする。

山口「智花」

智花、山口を見る。

山口「一回話さないか？」

智花「話すことなんてない」

と言いつ階段を上がろうとすると、祐樹が降りてくる。

祐樹の手にはテスト用紙。

祐樹「おかえりなさい」

智花「うん」

智花、階段を上がって行く。

祐樹「あの」

智花、祐樹を見る。

祐樹「今日テストがあって」

祐樹、テストを智花に見せる。

智花、100と書かれたテスト用紙を

見ると

智花「良かったね」

と、階段を上がって行く。

芳枝「智花」

祐樹、俯く。

○同・リビング（夜）

芳枝と山口、向かい合って座っている。

山口「恵とはよく言い合いになったが、智花とはほとんど無かった。今思うと、ちゃんと向き合ってなかったのかもしれない」

芳枝「恵には厳しかったからね。その反動じゃない」

山口「子供を育てるって難しいな」

芳枝「子供って変わっていく生き物だから。

でも大人になると中々変われない。だから

難しいのかも」

山口「そうだな」

○アンティークショップ・店内

塚本、掃除していると店の入り口の扉に付いた鈴が鳴る。

塚本「いらっしゃ・」

入口を見ると智花の姿。

○同・奥の部屋

塚本、ブックシェルフの扉を開けると

アルバムが入っている。
手に取り、智花に渡す。

塚本「どうぞ」

智花、アルバムを受け取り開く。

中には智花が楽しそうに電話している
写真が張られている。

塚本「過去を見て、何か変わりましたか？」

智花「ずっと、この世界にいられたらいいの
に。そう思いました」

塚本「本当に必要な人だけに思い出を見ても
らってるんです。じゃないと過去に閉じ込
められてしまう。自分たちが生きていかな
ければいけない世界はこつちだから」

智花「・・・」

塚本「だから思い出を見て強く生きてほしい
んです。人って色んなもの抱えて生きてる
でしょ。そのほとんどが過去から背負って
きたものだと思うんです。何故今に至るの
か、その理由が分かればきつと前に進める」

智花「・・・」

塚本「見終わったらアルバムを戻しておいて
下さい」

塚本、部屋を出て行く。

椅子に座る智花。

写真をポケットに入れ、アルバムを閉
じた後、目を瞑る。

○回想・山口家・智花の部屋（夜）

智花、電話している。

智花「CD聞いたよ」

秀一の声「どうでした？」

智花「まあまあかな」

秀一の声「まあまあか・・・」

智花「うそ。良かったよ」

秀一の声「ありがとうございます」

智花「サントラとかも作ってるんだね」

秀一の声「クラシックって好き嫌い別れるじ
ゃないですか。だから聞かない人は一生聞
かないと思うんです。でもサントラなら聞
きやすいかなって」

智花「確かにとっつきにくい。サントラがフ
アミレスならクラシックはレストランて感
じ」

秀一の声「入りづらいですよね。どの分野で
もそうですけど、その世界を知らない人に
興味を持ってもらうことが、その分野の発
展に繋がると思うんです。だから僕は好き
になるきっかけになりたいんです。入口に
なって色んな人に触れてほしい。そして音
楽を好きになってもらいたいです」

智花「私はなったよ。あなたのおかげでピア
ノが好きになれた」

秀一の声「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

智花「ねえアニメ見る？」

秀一の声「アニメは見ないです」

智花「じゃあピアノを好きになれたお礼に、
私がアニメを教えてあげる」

秀一「アニメですか？」

○回想・アニメシヨップ

智花と秀一、商品を見てる。

智花、商品を指差し

智花「これ人気なんだよ」

秀一「そうなんですか？」

智花「このアニメはね、未来から来たネコ型ロボットがブローチで変身して、月の形をしたステイックで戦うの。でもキャプテンの妹からバスケット部に誘われて、そこで仲間たちと一緒に全国制覇を目指すアニメ」

秀一「主人公忙しいですね」

智花「めちゃくちゃ面白いんだから」

秀一「今度見てみます」

○回想・カフェ

智花と秀一、コーヒーを飲んでる。

2人の隣にはアニメショップの袋。

秀一「沢山買いましたね」

智花「欲しいものいっぱいあったから。秀一

君は何買ったの？」

秀一「子供のお土産です」

智花「・・・子供いるの？」

秀一「はい」

智花「結婚してるんだ・・・」

秀一「正確にはしてた、ですけど」

智花「別れたの？」

秀一「バツがついちゃいました」

智花「そっか・・・」

沈黙が流れる。

秀一「子供って、ものすごい速さで成長していくんですよ。それについてくのがやっとで。大人も成長しないと子供って育てられないんですよね」

智花「私は子育てなんか出来そうにないな」

秀一「僕もそうでした。でも子供を通して学べる事や知ることがあって、何より人生に懸けれるものがもう1つ出来た。ピアノと子供、これが僕の人生です」

智花「私もいつか、そんな言葉を言えるようになってみたいな」

秀一「言えますよ・・・たぶん」

智花「たぶんって何？」

秀一「智花さんには絶対って言えない」

智花「何ですよ。こうなったら絶対に言ってるから」

秀一、微笑む。

智花「私の人生で懸けられるもの絶対見つけてやる」

秀一、智花を見ている。

○回想・山口家・リビング

智花と恵、向かい合って座っている。

智花「子持ちの男の人ってどう思う？」

恵「あんた、既婚者と関係持とうとしてるの？」

やめなさい。家族がいるんだから」

智花「子供はいるけど、離婚してる」

恵「結婚ってなったら、血の繋がってない子供を育てるんだよ。出来るの？」

智花「分からないけど、でもあの人となら出来る気がする」

恵「いつも勢いで失敗するんだから、今回は

止めときな。また落ち込んで死んでやるってなるよ」

智花「明日子供と一緒に会うことになってる」

恵「大丈夫なの？他人の子供好きになれる？」

智花「その人の子供だから好きになれる・・・

と思う」

恵「思うだけじゃダメなの。いい、明日で最

後にしなさい。絶対後悔するんだから」

智花「大丈夫。絶対後悔しないから」

智花、リビングから出て行く。

恵「もう・・・」

○回想・水族館入口

智花、歩いて来る。と、入口に立って

いる秀一と祐樹を見つける。

智花「秀一君」

秀一、振り向き智花に気づき会釈する。

智花、秀一たちのもとに駆け寄る。

智花「お待たせ」

秀一「今日はよろしくお願ひします」

智花、祐樹を見る。

智花「初めまして。山口智花って言います」

祐樹「新井祐樹です」

智花「よろしくね」

祐樹「よろしくお願いします」

智花「じゃあ行こうか」

秀一「はい」

○回想・同・館内2F

智花と秀一、歩きながら水槽の中の魚
を見ている。

少し後ろを祐樹が歩いている。

智花「見て、すごい綺麗」

秀一「綺麗ですね」

智花、振り向き祐樹を見る。

智花「祐樹君、ほら」

祐樹「僕は見たいところがあるので先に行っ
てます。出口の所で待ってますので」

祐樹、去って行く。

智花「嫌われてるのかな」

秀一「違います」

秀一、祐樹の後ろ姿を見ている。

○回想・同・館内1F

智花と秀一の前には大きな水槽。

そこで泳ぐ魚たちを見ている。

秀一「前の妻が祐樹に手を上げていました。

僕の前では何も無かったように振舞って、

全く気づけなかった。父親失格です」

智花「・・・」

秀一「周りに気を遣う子なんです。いつも大

人の目を気にするから、自分がしたい事じ

ゃなくて、人の顔を色伺って考える。たま

には自分の好きな事をやってほしいんです

けど」

智花「私と正反対。ずっと自分がしたいよう

に生きてきたから、少し見習わないと」

秀一「だから会ってもらったんです。智花さ

んといると、いつの間にか笑ってる自分が

いる。この時間を大切にしたいと思う。一

緒にいと変われそうな気がするんです。

自分や祐樹に無いものを持つてるから」

智花、秀一を見る。

秀一「子供って、大人に好かれないと上手く生きられないじゃないですか。だから自分を殺して仮面を被る。そんな生き方をしてほしくないんです」

智花「私でいいなら協力する。今まで人に甘えてばかりで、誰かのために生きるなんて考えてこなかった。でも必要とされるって嬉しいもんだね」

秀一、智花を見て微笑む。

○回想・同・館内出口

智花と秀一、館内から出てくると、ベンチに座る祐樹を見つける。

智花、手にペンギンの人形。

智花「祐樹君」

祐樹「早かったですね。もっとゆっくり見て来ても大丈夫ですよ」

智花、ペンギンの人形を祐樹に渡す。

智花「あげる」

祐樹、人形を受け取る。

智花「それと、3人で来てるんだからみんなで見よう。1人で見るより楽しいでしょ？」

祐樹「でも・・・」

智花「3人で見たいの。言っとくけど私わがままだから、祐樹君が嫌だって言ったら、ここから動かない」

祐樹「分かりました。ここから動いてほしいので、3人で見ましょう」

智花「そんな言い方されると、私がすごく子供みたいじゃん」

秀一「実際子供みたいでしたよ」

智花「ひどっ。もういい、祐樹君2人で見るから。秀一君はそこでお留守番」

秀一「僕も行きますよ」

智花「次、オランウータン見ようよ」

秀一「ここ水族館ですよ」

智花「いるじゃん。両生綱有尾目トラフサン

シヨウウオ科トラフサンシヨウウオ属に分
布される有尾類で、別名メキシコサラマン
ダーと言われる絶滅危惧種」

秀一「ウーパールーパーですよね？」

智花「それぞれ」

秀一「そこまで詳しいのに、何で名前を間違
えるんですか」

祐樹、2人のやり取りを見て微笑む。

智花、祐樹を見る。

智花「今笑った？」

祐樹「ごめんなさい」

智花、祐樹の前にしゃがむ。

智花「笑いたい時には笑って、泣きたい時に
は泣けばいい。周りの目気にして、自分に
嘘つかなくていいよ」

祐樹「・・・はい」

智花「よし、ルーパー見に行くぞ」

秀一「分けるならルーパーの方言いません？」

智花「ウーパーだどご飯運んできそうじゃん」

秀一「それはウーバーです」

智花「食料品沢山置いてそうじゃん」

秀一「それはスーパーです」

智花「オラン」

秀一「それはウータンです」

と言いながら館内に向かって行く3人。

○アンティークショップ・奥の部屋

智花、ゆっくりと目を開く。

○山口家・リビング（夜）

祐樹と山口、向かい合って座っている。

テーブルには食事が並んでいる。

そこに芳枝が入ってくる。

芳枝「いらないうって」

芳枝、テーブルに着く。

山口「智花は毎日どこ行ってるんだ？」

芳枝「聞いても答えてくれないの」

○同・智花の部屋（夜）

明かりの点いてない部屋。

智花、ベッドの上に座っている。

手には秀一のCD。

立ち上がりCDコンポの前に立つ。

ケースからCDを取り出しコンポに入れる。

再生ボタンに指を置くが、押せずにいる。

指を下ろし、立ち尽くす。

○同・リビング

芳枝と恵、向かい合って座っている。

恵「外に出るようにはなったんだ。良かったじゃん」

芳枝「でも祐樹君とは全く話してないの」

恵「そこも考えないとダメだね。祐樹君も辛いだろうし・・・」

芳枝のスマホに着信が入る。
画面を見ると新井利一と表示されている。

○同。智花の部屋

智花、ベットで横になっている。
するとドアがノックされる。

芳枝の声「智花、話があるの」

○同・リビング

智花、芳枝、恵、テーブルを囲む。

芳枝「さつき秀一さんのお父さんから電話があつたの。明後日こっちに来るって」

恵「祐樹君のことじゃない？」

智花「だから」

恵「だからって何よ」

智花「私には関係ない」

○同・玄関／廊下

祐樹、入ってくる。

恵の声「関係ないわけないでしょ！ちゃんと責任持ちなさい。前にも言ったけど、あんたみたいなのでも母親なの。血の繋がりなんて関係ない」

○同・リビング

智花、芳枝、恵、テーブルを囲み言い争っている。

智花「秀一のお父さんから電話来たんでし

よ？ならそっちで預かってもらえばいい」

恵「あんたね」

智花「今の私には無理だよ。こんな人間に誰かを育てるなんて出来るわけない。向こうで見てもらった方が幸せになれる。祐樹君もそう思ってるよ」

芳枝「智花、本当にそれでいいの？」

智花「・・・」

○同・廊下

リビングの扉の前に立つ祐樹。

悲しげな表情を浮かべ話を聞いている。

○同・リビング（夜）

芳枝と山口、向かい合って座っている。

山口「智花がそう言ってたのか？」

芳枝「うん」

山口「祐樹君は？」

芳枝「帰って来てからずっと部屋に居るの。

なんか具合悪いみたい」

○同・祐樹の部屋（夜）

祐樹、ベッドの上に座っている。

視線を部屋の隅にあるピアノに移す。

○同・智花の部屋（夜）

智花、虚ろな様子でベッドに座ってい

ると、隣の部屋からピアノの音が聞こ

えてくる。

○回想・サントリーホール・大ホール（夜）

秀一、ステージ上でピアノを弾いてい
る。

弾き終わると客席から盛大な拍手が送
られる。

その中に智花と祐樹の姿。

秀一、椅子から立ち上がり客席に挨拶をしようとする、床に倒れ込む。

智花、立ち上がり

智花「秀一！」

○同・智花の部屋（夜）

耳を塞いでいる智花、祐樹の部屋がある方向に視線を移し睨む。

○同・祐樹の部屋（夜）

祐樹、ピアノを弾いている。

智花、部屋に入ってくる。

智花「止めて！」

祐樹、弾くのを止め智花を見る。

智花「あの時のことを思い出すの。これ以上

傷を広げないで」

祐樹「ごめんなさい・・・」

芳枝と山口、慌てた様子で来る。

芳枝「どうしたの？」

智花「・・・ごめん」

智花、部屋に戻って行く。

芳枝「何があったの？」

祐樹「僕が悪いんです。ご迷惑おかけして申

し訳ありません」

山口、祐樹を見てる。

○同・智花の部屋（夜）

智花、ベッドで横になっている。

するとドアがノックされる。

山口の声「いいか？」

智花「・・・うん」

ドアが開き、山口が入ってくる。

山口「結婚して後悔してるか？」

智花「・・・分からない」

山口「人の気持ちなんて時間と共に変わる。

何かを失えば尚更だ。もう取り戻せないと

いう喪失感が過去を美化する。だけど、今

目の前にあるものがお前の全てだ。増やし

ていくのか、減らしていくのか、どちらが

正しかは分からない。でも一度手放したら

二度と戻らないこともある。その上で決めなさい」

山口、部屋を出て行く。

○アンティークショップ・奥の部屋

智花、椅子に座っている。

手には開かれたアルバム。

アルバムには智花、秀一、祐樹がテ-

ブルを囲んでる写真。

智花、写真を眺めていると

塚本の声「何か見つけることは出来ましたか？」

智花の後ろに塚本が立っている。

智花「あの思い出を見せた意味は分かるけど、正直どうしていいか分かりません。変わらなくちゃいけないけど、今の私じゃ・・・」

塚本「過去に答えがあるわけじゃありません。今必要な選択をするのは今のあなたです。でも過去の行動や選択が現在を作り出します。そこに自分を変えるきっかけがあつて、

答えを導いてくれるんだと思います」

智花「・・・」

塚本「ここに来たのも、あなたのご主人が導いてくれたような気がします。そして思い出を見る選択をした。すでに変わっていませんよ」

塚本、部屋を出て行く。

智花、写真をポケットに入れアルバムを閉じる。

そして、ゆっくりと目を瞑る。

○回想・新井家・リビング

智花、祐樹、秀一、テーブルを囲む。

智花と秀一は緊張した様子。

秀一「あのね祐樹、何ていうか、えーっと・・・」

智花「私が言う」

智花、息を整え

智花「祐樹君、もっと前に言わないといけな

かったんだけど：やっぱり秀一が言って」

秀一「何て言うか、その、今日は天気が良い

「というか・・・」

智花「ちよっと、関係ないでしょ」

祐樹「再婚ですか？」

智花と秀一、祐樹を見る。

祐樹「緊張した様子を見ると僕に言いづらいことだと思いますから、たぶん再婚かと」

智花「恐ろしい推察力」

秀一「祐樹の言った通り、智花と結婚したいと思ってる。でも僕1人で決めれることじゃない。祐樹がどう思ってるか知りたいんだ」

祐樹「僕は構わないよ」

智花「ほんとに？私がお母さんになってもいい？」

祐樹「はい」

智花「血は繋がってないけど、本当の家族になりたい。悲しい時は一緒に泣いて、嬉しい時は一緒に笑う。どんな時も寄り添える家族でいよう」

祐樹「はい」

秀一、微笑む。

○回想・秀一の実家・リビング

智花と秀一、座っている。

目の前には新井利一（59）と新井圭子（57）が座っている。

新井「智花さん、祐樹は君の子じゃない。血が繋がっていない子を育てるのは大変なことだよ」

智花「それを分かったうえで秀一さんと結婚したいと思ったんです。血の繋がりは関係ありません。誰が何と言おうが祐樹君は私の子供です」

圭子「ここまで言われたら認めるしかないんじゃない」

新井「・・・分かった。その代わり祐樹を大切に育ててほしい。前の母親のことは聞いたと思う。同じことは絶対にしてほしくない」

智花「はい。もう悲しい思いはさせません」

秀一「智花は違うよ。僕が保証する」

新井「ああ」

○回想・チャペル

ウエディングドレスを着た智花、タキシード姿の秀一が、並んで写真を撮っている。

フォーマルスーツを着た祐樹、隅っこで2人を見ている。

カメラマン「じゃあもう1枚撮りますね」

智花「待った」

智花、祐樹を見る。

智花「やっぱり祐樹君も撮ろうよ」

祐樹「僕は大丈夫です。2人の為にあるものですから」

智花、祐樹の所に行く。

智花「前にも言ったでしょ。3人で来てるんだから3人で撮る。もう家族なんだから、何をやるにも3人」

秀一もやってくる。

秀一「これからは僕たちに気を遣わなくてい

いから。言いたいことがあれば言っていし、やりたいことがあればやればいい。周りのことを考えるのは悪いことじゃないけど、祐樹の人生なんだから、自分で自分のこと縛らなくていいよ。もっと自由に生きて」

祐樹「うん」

智花「じゃあ行こう」

祐樹「はい」

智花、秀一、祐樹、カメラの前に立つ。

智花「次は3人でお願いします」

カメラマン「そしたらもう少し寄って下さい」

中央に寄った後、カメラに視線を合わせる3人。

カメラマン「じゃあ撮りますね。はいチーズ」

カメラマン、シャッターを押す。

○回想・新井家マンション・祐樹の部屋

祐樹、勉強していると部屋をノックする音。

祐樹「はい」

智花の声「入っていい？」

祐樹「どうぞ」

智花、入ってくる。

智花「お昼ご飯どうする？」

祐樹「何でも大丈夫です」

智花「何でもかー・何かない？」

祐樹「・・・じゃあ、ハンバーグで」

智花「分かった」

智花、部屋の隅にあるピアノを見る。

智花「ねえ、祐樹君」

祐樹「はい」

智花「ピアノ弾ける？」

祐樹「少しなら」

智花「聞かせて」

×

×

×

祐樹、ピアノを弾いている。

それを聞いている智花。

演奏が終わり、智花が拍手する。

智花「上手」

祐樹「ありがとうございます」

智花「ピアノの音色って良いよね。心が落ち着くっていうか、優しい気持ちになる。私が元気ない時にまた聞かせて」

祐樹「はい」

智花「祐樹君も将来ピアニストになるの？」

祐樹「なれたらって思います」

智花「やっぱり秀一に憧れて？」

祐樹「はい」

智花「弾いてる時カッコいいもんね」

祐樹「弾いてる姿を見たからじゃないです」

智花「違うの？」

祐樹「昔お父さんが言ってたんです。音楽は人の人生を変える力があるって。それを聞いた時、僕も誰かを変えられるような人になりたいって思ったんです」

智花「祐樹君なら絶対出来る。もし他の誰かが出来ないって笑ったら、私がぶん殴ってやるんだから」

祐樹、智花を見てる。

智花「私と秀一の息子なんだから、絶対なれる。あっ、私とピアノ関係ないか」

祐樹「フフ」

智花「笑ったな」

祐樹「ごめんなさい、可笑しくて」

智花「そうだ、一緒にハンバーグ作るっか？」

祐樹「はい」

智花「そうと決まったら、沢山作ろう」

祐樹「そんな食べれませんよ」

智花「大丈夫、余ったら全部秀一に食べさせ

ればいい」

祐樹「そうですね」

2人、笑う。

○回想・同・リビング（夜）

智花、ソファで雑誌を見ていると秀一が帰ってくる。

秀一「ただいま」

智花「おかえり」

秀一「祐樹は？」

智花「寝たよ」

秀一「そっか」

秀一、ソファに座る。

智花「ねえ？」

秀一「ん？」

智花「祐樹君ピアニストになるって」

秀一「そうなの？」

智花「音楽は人の人生を変える力がある。そ

の言葉に動かされたって」

秀一「ああ、前にそんなこと言ったかな」

智花「良いよね、夢があるって。私なんかゆ

の字も無かったよ。秀一はもう叶えたでし

よ？」

秀一「夢の途中かな」

智花「まだあるの？何？」

秀一「笑わない」

智花「うん」

秀一「ピアノで人の命を救いたい」

智花「命？」

秀一「人を救う仕事っていくつかあるでしょ。」

医師や警察官、消防士、ほとんどのものが何かあってから行動するけど、映画だったり音楽は、何かある前に人の命を救うことが出来る。命を絶とうとした人が、その作品に触れて何か感じてくれれば、また生きてみようってなると思うんだ」

智花「・・・」

秀一「そんなこと無理だってみんなは言う。でも自分で出来ると思うかどうか、それが大切だと思うんだ。僕が好きな事だから、僕が一番信じてあげないと、本当に何も出れない気がするんだ」

智花「フフ」

秀一「笑わないって言ったのに」

智花「違う。他の人が言ったら無理だって思った。でも秀一なら出来る気がする。人の命とかそんな大きいこと、今までの私だったら信じられなかったから。思わず笑っちゃった」

秀一、智花を見ている。

智花「私の夢も言っていていい？」

秀一「何？」

智花「絶対に切れない絆を作りたい。血は繋がってないけど、それでも本当の家族にはなれると思うの。だから約束する。何があっても2人を幸せにするから」

秀一「うん」

○アンティークショップ・奥の部屋

智花、ゆっくりと目を覚ます。

○同・店内

塚本、レジで本を読んでいる。

奥の部屋の扉が開き、智花が出てくる。

春山「どうでしたか？」

智花「・・・」

春山「・・・いつか笑えるように、そう願っています」

智花「・・・」

○山口家・智花の部屋（夜）

智花、写真を見ている。

写真にはウエディングドレスを着た智花とタキシード姿の秀一。2人の前には子供用のフォーマルスーツを着た祐樹が写っている。

○ホテル・ラウンジ

智花、祐樹、芳枝、山口が座っている。

向かいの席には新井と圭子。

新井「考えたんですが、祐樹はうちで預かるうと思えます」

祐樹、新井を見る。

新井「秀一が亡くなった時、祐樹は智花さんを選びましたが、やっぱり血の繋がってない子供を育てるのは大変だと思います」

圭子「今は考えられないかもしれませんが、いつかは新しいお相手も見つかるかもしれません。ご自身の人生もありますから、うちで祐樹を預かるのが一番いい選択肢だ

「と思います」

芳枝「祐樹君はどうしたい？」

祐樹「僕は・・智花さんがどう思ってるか聞きたいです」

一同、智花に視線を移す。

智花、俯いたまま何も話さない。

山口「智花」

智花「私は・・」

祐樹、智花を見る。

智花「自分が良い母親にはなれるとは思いません。お二人の言うことも正しい。だけど：ごめんなさい。答えが出ない」

祐樹「・・・」

新井「祐樹のためにもできるだけ早く決めた方がいいと思います。私たちも頻繁に来れるわけじゃありません。今日はこちらに泊まるので、明日ご自宅に伺わせて頂きたいと思います。それまでに祐樹をどちらで預かるか決断して下さい」

芳枝「分かりました」

山口、智花を見る。

○同・リビング

智花、芳枝、山口、恵がテーブルを囲む。

恵「祐樹君があんたの意見聞きたいって言ったのは、智花と一緒に居たいってことでしょ」

智花「ちゃんと育てられる自信がないの。今の私は母親になる資格はないから」

恵「育てようとしてもしてない人間が何言ってるの。みんなそうだよ、最初から自信ある親なんて1人もいない。それでも子供の為に必死になって毎日生きてるの。お金も出ない、褒めてももらえない、当り前だって言われる。正直しんどいよ。でもね、子供は親がいないと生きていけない。祐樹君は1度裏切られた。でもあんたのこと信じて着いて来てくれたんだよ。人を信用をするってそんな簡単に出来ることじゃない。ここ

で手放したら、もう誰も信じられなくなるよ？あんたはそれを背負ってるの。親としての資格は責任と覚悟。それがあるかどうか。今からでも持てるでしょ？」

智花「・・・」

○公園

ベンチに座る祐樹。

遊んでいる親子を見ている。

○山口家・智花の部屋（夜）

智花、ベッドの上に座っているとドアがノックされる。

山口の声「いいか？」

智花「・・・うん」

山口、入ってくるとベッドの前に座る。

山口「恵には厳しく接してきた。それもあつてか、よく喧嘩もしたし、ものすごく嫌われた。智花に怒ってこなかったのはな、嫌われたくなかったんだ。だけど親なら嫌わ

れてでも育てないといけない。でも実際に嫌われると、これがきつくてな。親としては失格だが、智花にはだいぶ甘くなった。それを今は後悔してる」

智花、山口を見る。

山口「ちゃんと向き合えばよかった。嫌われてでも叱るべきだった。その積み重ねが今に至る」

智花「・・・」

山口「だけど1つ言えるのは、恵も智花も俺の大切な娘だ。たとえ血が繋がってなくても、本当の子供だって思えるし、2人の為ならなんだって出来る。大事なのは血の繋がりがじゃない。お互いが親子だと思えるかだ。同じ血が流れていようが心が離れている人間もいる。大切なものは、目には見えづらいもんだ」

智花「・・・」

山口、立ち上がり部屋を出て行く。

○山口家・祐樹の部屋

祐樹、写真を見ている。

写真には智花、祐樹、秀一がステージの上で微笑んでいる姿。

するとドアがノックされる。

芳枝の声「入っていい？」

祐樹「はい」

芳枝、入ってくると祐樹の隣に座る。

祐樹が見ている写真が視界に入る。

芳枝「智花と一緒に居たい？」

祐樹「智花さんは僕と居るの嫌ですよね」

芳枝「お父さんが亡くなった時、何で智花を選んだの？向こうの両親の方が気を遣わなくて済むでしょ？」

祐樹「・・・」

芳枝「ごめんね。こんなこと聞くべきじゃなかったね」

祐樹「前のお母さんにはずっと否定されてきました。何をやっても褒められたことは無かったんです。でも智花さんは僕の夢を絶

対出来るって信じてくれた。だから智花さんが辛い時は力になりたかったんです」

芳枝「・・・」

祐樹「でも無理でした。やっぱり僕じゃ何も変えられない。お父さんみたいにはなれなかったです・・・1度でいいから、僕の好きになってもらいたかった」

芳枝、祐樹を見てる。

○山口家・廊下

芳枝、2階から降りてくると智花が玄

関で靴を履き替えている。

芳枝「どこ行くの？」

智花「・・・」

芳枝「秀一君のご両親、この後来るのよ」

智花「それまでには帰ってくる」

智花、家を出る。

芳枝「智花」

○アンティークショップ・奥の部屋

塚本、ブックシェルフからアルバムを
取り出す。

塚本「どうぞ」

智花、アルバムを受け取る。

智花「これから大事な選択をしなければいけません。この中にその答えに繋がるものがあるような気がします」

塚本「3回の思い出に触れて、あなた自身に何かしらの変化はあったと思います。人は変わっていく過程の中で、大切なものを学びます。そこで得たもので選ぶ道が変わる。

今はその分岐点に立っているんでしょう。大切なものは大概自分の中にある。それを引き出してくれるのが思い出なんです」

智花、椅子に座りアルバムを開く。

中にはコンサート会場での祐樹と秀一の写真。

智花「この写真の思い出、見覚えがない」

塚本「稀にですが、別の人間の思い出が映ることがあります。もしかしたら、その御二

方のどちらかの思い出かもしれない」

智花、アルバムから写真を取り出す。

塚本「祐樹は元気にしていますか？」

智花、塚本を見る。

塚本「祐樹は私の孫なんです」

智花「もしかして、秀一の前の・・・」

塚本「ええ、娘は親としてやってはならない過ちを犯した。それは絶対に許されないことです。祐樹に償いたかった。だからあの場所であなを待っていたんです。いつか来てくれると信じて。これは罪滅ぼしです。父も母も失った祐樹が幸せに生きるためには支えになる人が必要だから。情けないですが、託すことしか私には出来ない」

智花「人の人生を背負えるほど、大きな器は持っていないし、人を幸せに出来る力もない。私には何もないけど、大切な人との約束を守りたい。その責任と覚悟を持ったために、今日は来ました」

塚本「何も持っていないんじゃない。ただ見

えていないだけです。過去があなたを照らしてくれる。楽しかったことも、苦しかったことも、いずれは道に変わる。大丈夫、きっと前に進めますよ」

塚本、部屋から出て行く。

智花、写真を見る。

○同・店内

塚本、奥の部屋から出てくる。

扉を閉め、回想する。

○回想・斎場・式場前の通路

塚本、歩いて来る。

式場の入口に祐樹の姿が見える。

近づいて行くとすすり泣く声が聞こえる。

祐樹の視線の先を見ると式場ですすり泣く智花。

○アンテークショップ・店内

塚本、扉の前に立っている。

○同・奥の部屋

智花、写真を見ている。

写真をポケットに入れアルバムを閉じ、
目を瞑る。

○回想・サントリーホール・大ホール

智花、祐樹、秀一、通路を歩いて来る。

智花「大つきいね。ここで弾くんだった」

秀一「うん。初めて見たコンサートがここだったんだ。それからかな、ピアノを始めたのは。だからこの会場でピアノを弾くのが1つの夢だった」

智花「その夢が、今日の夜に叶うんだね」

秀一、立ち止まる。

秀一「座って。智花と祐樹が最初のお客さん」

智花「うん」

智花と祐樹、席に着く。

秀一、舞台に向かう。

舞台の真ん中にはピアノ。

秀一、椅子に座り鍵盤に指を添え、演奏を始める。

バラード調の曲を弾く秀一。

その姿を見ている智花と祐樹。

しばらくして演奏が終わる。

智花と祐樹、拍手を送る。

秀一、立ち上がり智花たちのもとに来る。

智花「最高だった」

秀一「ありがとう」

智花「こんな大きいホールで2人締めできる

なんて最高だね」

祐樹「はい」

智花「そうだ、3人で写真撮ろう。誰か呼んでくるから待ってて」

智花、ホールを出る。

祐樹「良かったよ、お父さん」

秀一、祐樹の目線に合わせて屈む。

秀一「祐樹には謝らないといけない。手を上

げられてたのに気づけなかった。本当にごめん。でも約束する。もう2度と辛い思いはさせない。僕1人じゃ不安かもしれないけど、僕と智花で支える・あつ、でも智花もすぐに落ち込んだりするから、その時は僕と祐樹で支えよう」

祐樹「智花さんが来てから楽しいことが増えていった。家族ってこういうものかを知れた。親になってくれて嬉しかった。だから後悔してほしくないんだ。僕たちと一緒になったこと」

秀一、祐樹を見てる。

祐樹「ずっと周りの目気にして、嫌われないようにって振舞ってた。でもそれって、受け取ることばかりで自分からは何もしてなかった。だから人に与えられるような人間になる。そうすれば後悔しないと思うんだ。智花さんには笑っていてほしい。笑ってくれたら、僕も嬉しいから」

秀一、微笑む。

ホールの扉が開き、智花と係員が入ってくる。

智花「写真撮ってくれるって」

智花と係員、秀一と祐樹のもとに来る。

秀一「ごめんなさい。忙しいのに」

係員「いえ。大丈夫です」

智花「どうせだから、ステージの上で撮ろう」

智花、係員にスマホを渡す。

智花「お願いします」

係員「はい」

智花、祐樹、秀一、ステージに上がる。

ピアノの前に立つ3人。

係員「じゃあ撮りますね。はいチーズ」

笑顔で写真を撮る3人。

○アンティークショップ・奥の部屋

智花の目から涙が零れる。

ゆっくりと目を開く。

○同・店内

塚本、レジで座っていると奥の部屋の扉が開き、智花が出てくる。

智花、塚本の前に行く。

塚本「どうでしたか？」

智花「ずっと自分のことばかりで分からなかったけど、大切なものに何度も触れていた」

× × ×

(フラッシュユ)

祐樹、ご飯を乗せたトレイを持っている。

× × ×

(フラッシュユ)

祐樹、智花にテストを見せる。

× × ×

(フラッシュユ)

祐樹、ピアノを弾く

× × ×

智花「感情に支配されて全く気づけなかったけど、やっと見つけることが出来た」

塚本「幸福の中で生きるのと、孤独の中で生

きるのでは見え方が変わります。幸せの中
では温かさを感じれる。冷めてしまえば触
れたもの全てが冷たく感じる。見方を変え
れば、多くの答えが探し出せるんだと思っ
ます。思い出がそれを導いてくれた。どう
か祐樹を宜しくお願いします」

智花「はい」

と頭を下げ、店を出て行く。

○山口家・リビング

祐樹、恵、芳枝、山口、座っている。

恵「こんな時にあの子はどこ行ったの？」

芳枝「電話掛けてみる」

芳枝、スマホで電話を掛ける。

するとインターホンが鳴る。

恵「来たんじゃない」

山口、インターホンのモニターを見る。

山口「秀一君のご両親だ」

芳枝、不安な表情を浮かべていると、

智花が電話にでる。

智花の声「お母さん」

芳枝「あんたどこに居るの？」

○車内

智花、タクシーの後部座席で電話して
いる。

芳枝の声「2人来たよ」

智花、外を見ると渋滞している。

智花「道が混んでてもう少しかかりそう。

少し待っててもらって」

芳枝の声「あんまり待たせられないからね」

智花「分かった」

智花、電話を切る。

車内の時計を見ると2時55分。

○山口家・リビング（夕）

祐樹、恵、山口、新井、恵子、座って
待っている。

新井、腕時計を見ると5時30分。

芳枝、スマホを持ってリビングに入っ

てくる。

新井「もう行かせてもらいます」

恵「智花は？」

芳枝「もうすぐ着くみたい。だからもう少し待っていただけませんか？」

新井「今日は祐樹の今後を決まる大事な日です。そんな時に出掛けるなんて。祐樹はうちで預からせて頂きます。彼女に任せることは出来ません」

祐樹「・・・」

○同・玄関（夕）

玄関から新井と恵子が出てくる。

後から山口、芳枝、恵、祐樹。

新井「学校のこともあるので、暫くはこちらで見て下さい。頃合いを見て迎えに来ますので、また連絡差し上げます」

新井と恵子、門を出て道に出ると

祐樹「待って」

新井と恵子、振り返る。

祐樹、新井のもとに行く。

祐樹「もう少しだけ待ってほしい。智花さんの口からどうするか聞きたい」

新井、祐樹の前にしゃがむ。

新井「祐樹と智花さんは血の繋がりはない。形式的には親子だとしても、実際は赤の他人だ。もし前みたいなことになったらと思うと正直不安だった。私たちにとっては初めて、それもたった1人の孫だ。もう辛い思いはさせたくない」

祐樹、俯く。

新井、立ち上がり

新井「少ししたら迎えに来る。それまでは皆さんに迷惑かけないようにしなさい」

新井と恵子、山口たちに向かって会釈をし、立ち去ろうとする

智花の声「遅れてごめんなさい」

新井と恵子が振り返ると、息を切らした智花の姿。

恵「あのバカ。やっと来た」

智花「本当にごめんなさい。ずっと迷っていた。でもやっと答えが見つかりました」

智花、祐樹の前に立つ。

智花「今までごめん。前のお母さんのことも知ってたのに、それなのにまた辛い思いさせちゃった。覚悟も無ければ責任も持てない最悪の母親だったよね。ずっと自分の為に生きてきたの。誰かを好きになって、失っては落ち込んで、周りに迷惑かけても気にしない、そんな日の繰り返し。本当にバカだった。大切なものがすぐそこにあるのに、何で気づかなかったんだろ」

祐樹、智花を見てる。

智花「きつと後悔してるよね。秀一が私と結婚したこと。でももう背を向けない。祐樹君が笑っていられるように、私で良かったって言うてもらえるように努力する。だから：もしもう1度チャンスをくれるなら、あなたの母親になってもいい？」

祐樹「・・・今までずっと隠してきました。甘

えたいし、自分の事を好きになってもらい
たい。テストで良い点取ったら褒めてほし
い。僕のピアノも聞いてもらいたい。して
ほしい事だつて山のようにあります。本当
はものすごくワガママなんです。それで
も・・こんな僕でも、あなたの息子になれ
ますか？」

智花、涙を流し祐樹を抱きしめる。

智花「これからは好きだけど甘えていいし、
良い点取ったら褒める。ピアノだつていつ
でも聞いてあげる。だから、私と家族にな
つて」

祐樹「はい」

新井、智花と祐樹の側に来る。

新井「智花さん、約束して下さい。祐樹に辛
い思いは絶対にさせないと。血は繋がらず
とも、本当の家族であることを」

智花「はい、約束します」

新井、恵子のもとに行き

新井「行こう」

恵子「ええ」

新井と恵子、立ち去る。

○ピアノ教室

祐樹、ピアノを弾いている。

隣には講師が座っている。

智花、部屋の隅で祐樹を見ている。

○並木道

祐樹と智花、歩いている。

智花「やっぱり祐樹のピアノは世界一だね」

祐樹「大袈裟だよ」

智花「そんなことない。私が世界一って言っ

たら世界一なの」

2人の前から手を繋いだ親子が歩いて

来る。

祐樹、親子を見ている。

智花、祐樹を見る。

智花「はい」

智花、手を差し出す。

祐樹、智花の手を握る。

智花「私も世界一のピアニストの母親か。どうしよう、テレビの人とか来て美人母特集とか組まれたら」

祐樹「たぶんないよ」

智花「分かんないじゃない」

祐樹「フフ」

智花「もしテレビの人が来て、祐樹の事聞かれたらこう答えるの。祐樹のピアノは聞いている人の世界を変えてくれる。そんな音楽を作れる人だって」

祐樹「だから大袈裟だよ」

智花「それでね、祐樹のピアノを隣で聞くことが、私の人生ですって言うの」

祐樹「なんかプレッシャーだな」

智花「大丈夫。何とかなるから」

祐樹「僕もお母さんみたいに生まれたかった」

智花「今、お母さんって言った？」

祐樹「言ったけな」

智花「もう一回言って」

祐樹「言っつて言われると嫌だ」

智花「何でよ、言っつて」

祐樹「今度ね」

智花「お願い、10回だけ」

祐樹「普通1回でしょ」

智花「もう、意地悪なんだから」

祐樹、智花を見る。

祐樹の心の声「ありがとう、お母さん」

智花と祐樹、手を繋ぎ並木道を歩いて

いく。

E
N
D